

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：37101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21720141

研究課題名（和文） 音調の伝播・定着のメカニズム解明にかんする探索的調査研究

研究課題名（英文）

研究代表者

岡田 祥平 (OKADA SHOHEI)

九州共立大学・共通教育センター・講師

研究者番号：20452401

研究成果の概要（和文）：本研究は、田中ゆかり氏によって命名された「とびはね音調」と呼ばれる首都圏の若年層に観察される「新しい」音調が、日本の地域社会にどのように伝播していくのか、そのメカニズムを模索するものである。研究期間内には、福岡県北九州市に所在する大学 1 年生を対象とした言語意識調査を実施するとともに、「とびはね音調」そのものの性質を詳細に記述すべく、首都圏生え抜きの大学生同士の対話音声の分析を行った。

研究成果の概要（英文）： This research examines the mechanism and spread of “Tobihane Tone” in Japan’s rural areas (“Tobihane Tone” -New Rising Intonation-, a concept proposed by Dr. TANAKA Yukari, is used by youth in Tokyo’s metropolitan area). This study analyzes the language consciousness of university freshmen in the City of Kitakyushu, Fukuoka Prefecture. In addition, dialogues spoken by combinations of university students, who were raised in the area, were examined to provide an in-depth analysis of the features of “Tobihane Tone”.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：日本語学，音声学，社会言語学，イントネーション，「とびはね音調」，首都圏方言，自発的な対話音声

1. 研究開始当初の背景

「とびはね音調」（田中 2007, 2010, 2011 など）とは、東京首都圏において、「形容詞否定形＋ナイ」という形式のときに現れる音

調である。従来型の音調と「とびはね音調」を対峙させて示せば、以下のようになるが、疑問の場合は従来型音調が生起し、「とびはね音調」は同意要求の場合に生起する傾向が

あることが、既に先行研究で明らかになっている(蔡 1996・田中 2007 など)

・従来型の音調: 「カワイ ϕ クナイ」(「 ϕ 」はアクセントによる音の下がり目を意味する)

それぞれの語(「カワイ」「ナイ」)のアクセント核を保持したうえで、文末拍「イ」で上昇する

・「とびはね音調」「カワイクナイ」

それぞれの語のアクセント核は消失、文末に向かって上昇を続ける

「とびはね音調」は、その存在が初めて報告された 1990 年代前半(田中 1993)では東京首都圏若年層に限って観察される現象であったが、田中(2007)は中年層にもこの音調が徐々に浸透して行っていると指摘している。「現代は各地で「東京語化・東京弁化」が進んでいる」(井上 2007)という指摘も存在するが、それでは東京首都圏で一般化しつつある「とびはね音調」も日本各地で使われているのであろうか。東京で使用されるイントネーションが全国各地にどのように伝播していくのか、その実態を明らかにした研究は、管見の限りでは見当たらなかった。

2. 研究の目的

本稿「1. 研究当初の背景」で述べた研究の現状を踏まえ、本研究では、「とびはね音調」を題材に、音調が日本の地域社会に伝播していくメカニズムの解明のための第一歩となる研究を遂行していく計画を立てた。

3. 研究の方法

(1)日本全国各地において、東京首都圏の「とびはね音調」に類する音調、すなわち、同意要求の際に「クナイ」という表現において、アクセント核が消失されるという現象が観察されるか否かを観察するためには、東京首都圏で「とびはね音調」が観察される形式、つまり地域を、調査対象として選定する必要がある。そこで、本研究では、福岡県北九州市に注目することにした。北九州市は、研究代表者が勤務する大学が所在し、研究のためのデータが収集しやすい。北九州市においても同意要求の際に「クナイ」という表現が頻繁に使用されているという報告がある地域だからである(橋本 2000)。しかし、北九州市で観察される、東京方言の影響が想定できる同意要求の際に使用される「クナイ」という表現形式が、どのような音調で実現されているのか、東京首都圏における「とびはね音調」との関係からも気になる点ではあるが、その実態を記述した研究は存在していない。そこで、北九州市に所在する九州共立大学の学生を対象に、東京首都圏の若年層の言

語がどのように受け入れられているか、調査を実施することにした。

(2)東京首都圏における「とびはね音調」の基本的な音声学的(あるいは音韻論的)特徴は、本稿 1. で述べたように、既に先行研究で明らかにされているが、詳らかな点は明らかにされていない。具体的には、声の高さ(基本周波数)の上昇幅や、アクセント核の消失が及び範囲、などは不明なままである。そこで、首都圏大学生 7 組の自由対話(合計約 7 時間)を収録し、そこに現れた「とびはね音調」の諸特徴を記述した。

4. 研究成果

(1)「九州共立大学キャンパスことば集」の編纂

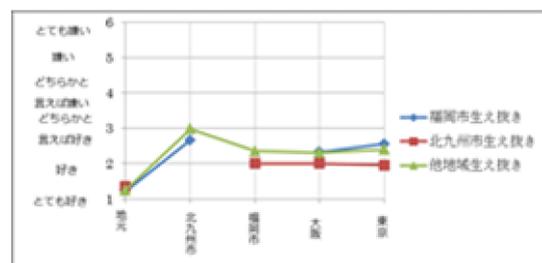
北九州地域の大学生の言語動態を把握するために、「九州共立大学キャンパスことば集」を編纂、論文として発表した(本稿「5. 主な発表論文」の[雑誌論文①])。

(2)九州共立大学生の言語意識調査

九州共立大学生が、どのような言語意識をもって、普段の言語生活を送っているのかを調査した。地元を離れて時間が経っていない 1 年生 132 人を調査対象とした。調査対象者を、①福岡県北九州市生え抜き(22 人)、②福岡県福岡市生え抜き(10 人)、③その他の地域生え抜き(100 人)、という 3 つのグループに分けて、調査結果を集計した(なお、その他の地域生え抜きグループの出身都府県別人数は、東京都 1 人、奈良県 1 人、兵庫県 3 人、鳥取県 1 人、島根県 1 人、岡山県 1 人、広島県 10 人、山口県 6 人、愛媛県 3 人、福岡県 22 人大分県 1 人、佐賀県 6 人、長崎県 2 人、熊本県 9 人、宮崎県 9 人、鹿児島県 12 人、沖縄県 12 人、である)。

以下、行った意識調査の結果を簡単に報告する。

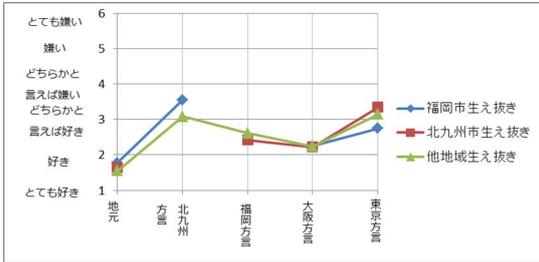
①都市好悪調査結果



どのグループとも、地元への愛着が強いことがわかる。また、どのグループとも、福岡市、大阪、東京に対しても、肯定的な評価をしていることが分かる。その一方で、福岡市

生え抜きグループとその他の地域生え抜きグループの、北九州に対する評価が若干低くなる。

②言語好悪調査



「①都市好悪調査結果」と同様、どのグループとも、地元の方言に対する愛着が強いことがわかる。一方で、どのグループとも、東京方言に対する評価が低くなっている。また、「①都市好悪調査結果」と同様、福岡市生え抜きグループとその他の地域生え抜きグループの、北九州方言に対する評価が低くなる。

③言語使用意識調査

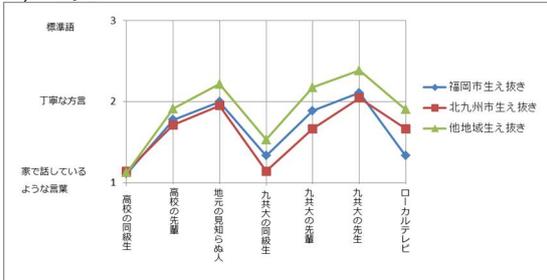
場面と相手に応じた言語の切り替え (code-switching) 意識を見るため、以下の相手と場面で、どの方言を使用するかという調査も行った。

・相手

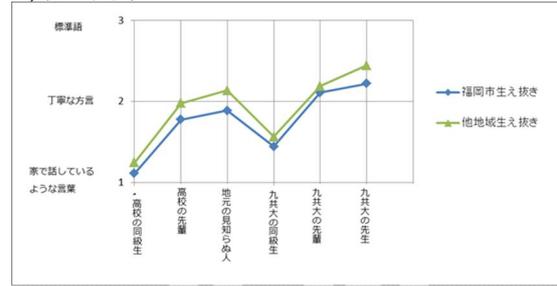
- 高校の同級生 (自分の母方言を話す、親しい人)
- 高校の先輩 (自分の母方言を話す、親しくて目上の人)
- 地元の見知らぬ人 (自分の母方言を話す、親しくない人)
- 九州共立大学の同級生 (自分の母方言を話さない、親しい人)
- 九州共立大学の同級生 (自分の母方言を話さない、親しくて目上の人)
- 九州共立大学の先生 (自分の母方言を話さない親しい人)
- テレビのインタビュー (公的場面)

・場面

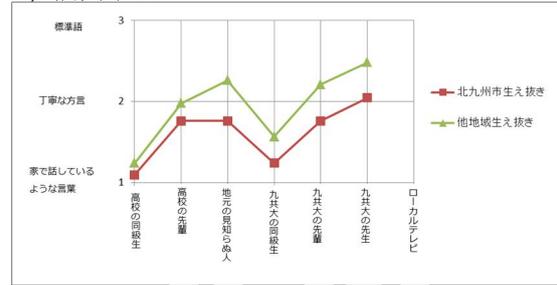
A) 地元



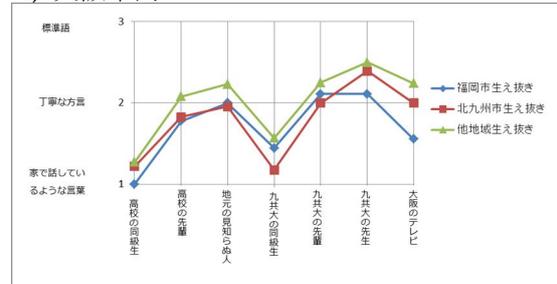
B) 北九州市内



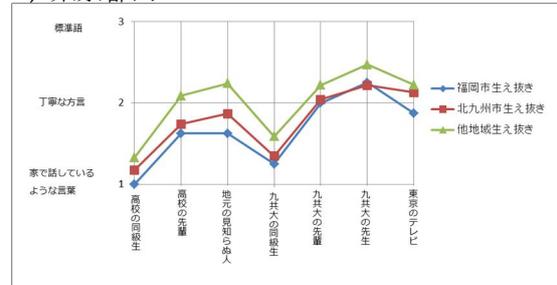
C) 福岡市内



D) 大阪市内



E) 東京都内



紙幅の都合上、詳細な分析を省くが、どのグループとも、場面さは code-switching の傾向に大きな影響を与えておらず、もっぱら相手に応じて code-switching を行なっている傾向が読み取れる。すなわち、どのグループとも、相手に応じた code-switching の傾向として、おおよそ、以下のような序列を見出すことができる。

←方言を使う

標準語を使う→

【高校の同級生>九州共立大学の同級生>>高校の先輩>九州共立大学の先輩>>地元の見

らぬ人>九州共立大学の先生】

おおよその傾向としては、親しい人には方言を、親しくない人には標準語を使うという傾向が見て取れる。この傾向は、すなわち、親しければ、たとえ相手が自分の母方言をしなくても、自分の母方言を使うということを意味する。このことは、在籍者の出身地が必ずしも均一ではない大学という場が、現代日本の若年層にとっては、異方言と遭遇する、いわば方言接触の場になっていることを示唆している（少なくとも九州共立大学では、大学が方言接触の場になっていることは間違いなさそうである）。このような事実を明示した先行研究は管見の範囲では見当たらず、本研究で明らかになった新知見の一つである。

また、標準語が使用されることが予想された、公場面であるテレビのインタビュー場面における使用言語の意識については、かなり特徴的な傾向を見出すことができた。すなわち、A) 地元場面においては、どの地域においても、方言を使う傾向にあるということ、c) 大阪市内場面、d) 東京都区内場面においても、極端に標準語使用には傾かない。このことは、公的場面においても標準語を使わない（あるいは使えない）という現代日本の若年層の言語使用意識の一端が明らかになったといえる。このような事実を明示した先行研究も管見の範囲では見当たらず、本研究で明らかになった新知見の一つである。この結果は、テレビというメディアに囲まれて生まれ育った現代日本の若年層にとっては、テレビインタビューという場面が、もはや公的場面とはとらえられなくなっていることを意味しているのかもしれない。

(3) 首都圏大学生の自由対話に現れた「とびはね音調」の諸特徴の記述

本稿「3. 研究の方法」で簡単に述べたように、首都圏若年層に観察される「とびはね音調」の詳細な記述を行うため、首都圏生え抜きの学生7組の対話（約7時間分）を収集した。今回収集した対話データに生起した「とびはね音調」計82例を対象に、以下の分析を行った。

① 「とびはね音調」生起の言語外的条件

田中（2010）には、「1992年調査当時には、特段の社会的コメントが付与されていなかった「とびはね」についても、1990年代後半より「ギャル」というような社会的コメントが付与されるようになってきた」「当該音調について最初の調査を行なった1992年時点においては、「とびはね音調」の存在自体が社会的認識にいたっておらず、1990年代後半辺りから付与されるようになった「東京の若

者」・「女子高生」・「ギャル」というようなステレオタイプもまだ形成されていなかった」とある。田中（2010）の指摘を踏まえると、「とびはね音調」は、男性よりも女性に生起しやすい傾向があると予想される。そこで、今回収集したデータについて、話者別に「とびはね音調」生起の回数を集計した結果、以下のような傾向を見出すことができた。

- ・「とびはね音調」を特に好む話者がいる（女性2名、男性1名）
- ・「とびはね音調」を特に好む話者3名を除き、話者の性別に「とびはね音調」生起の平均回数を求めたところ、性3.6回/人、男性3.75回/人と、性差は観察されない

② 「ナイ」の前接要素

「とびはね音調」が報告された当時は、「ナイ」に前接する品詞は、本稿「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、形容詞否定形であった。しかし、近年では、形容詞否定形以外に、[名詞/形容動詞+ジャナイ]という形式にも「とびはね音調」が生起するようになったという指摘がある（田中2011など）。

そこで、「ナイ」の前接要素別に「とびはね音調」が生起回数を調べた結果、以下のようになった。

- ・形容詞否定形/助動詞ナイ+クナイ/ネー（一）：42例
- ・名詞/形容動詞+ジャナイ（ネー）：34例
- ・それ以外：6例

この結果は、「とびはね音調」は、[形容詞否定形/助動詞ナイ+クナイ]に付随するだけでなく、現在においては、「名詞/形容動詞+ジャナイ」においても頻繁に用いられるようになったといえる。さらには、その両者以外の形式でも用いられる例が散見されるようになったことも意味する。すなわち、「とびはね音調」は、その発生時には[形容詞否定形/助動詞ナイ+クナイ]専用の音調であったが、現在ではその用法が拡大していることが伺える。

③ 「とびはね音調」の音響的特徴—上昇の有無—

「とびはね音調」の特徴として、先行研究では、「いったん上昇を始めると発話の最後まで上昇を続けるという特徴に加え、文末「～ナイ？」の上昇をぼんっと“とびはねる”ような音調」という記述がある。その一方で、「必ずしもぼんっと文末がはねあがらなければだららと上昇を続けるタイプ」（田中2011）も「とびはね音調」に含める見解や、「同意求め」の音調で「主流を占めたものは新型の平坦な上昇パターンであり、田中（1993）が指摘した文末で「とびはねて」いる印象よりも、むしろ平坦な上昇イントネーションが語のアクセントをも破壊し、平らに被さるという

特徴が顕著に見られた」(湧田 2003) という指摘もあり、実は、どのような音調を見せるのか、見解が一致していない。そこで、本研究では、「とびはね音調」がどのような音響的特徴を有するのか、主に先行研究で問題になっている上昇の有無という観点から、分析を試みた。

今回の分析では、「簡単な音響分析」で、上昇型と非上昇非下降型に2つのグループに分けることにした。「簡単な音響分析」というのは、今回の分析対象が自発発話であるため、基本周波数(F0)抽出に理想的な音環境を整えることが出来なかったという事情により、以下のような極めて素朴な手法を採用したということである。すなわち、F0の精緻な観察をするためには、そのための方法論を構築する必要があると考えるが、今回の分析においては、その方法論を見出すに至らなかった。それゆえ、今回の分析では客観性にかけては承知しつつ、素朴な手法を採用することにした。すなわち、音響分析により抽出したF0を目視し、その目視した結果から受ける「印象」をもとに、音調の分類を行った。

その結果は、以下に示すとおりである。

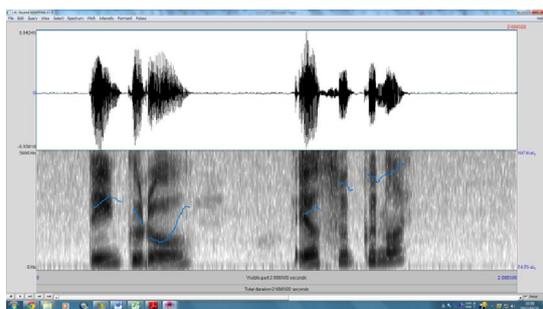
・上昇型: 65例

・非上昇非下降型: 17例

とびはね音調は上昇することが前提なので、当然、上昇型が多いのは当然なのだが、聴覚印象では「とびはね音調」に聞こえたものの中に、音響分析を施すと非上昇非下降型のものが少なからず存在することがわかった。非上昇非下降型というのは、上昇もしないが、通常の発話であれば観察される自然下降(declination)が観察されないという点で、東京方言の標準的な韻律構造から逸脱しているため、「1992年調査当時では、特段の社会的コメントが付与されていなかった「とびはね」についても、1990年代後半より「ギャル」というような社会的コメントが付与されるようになってきた」(田中 2010)と考えられる。

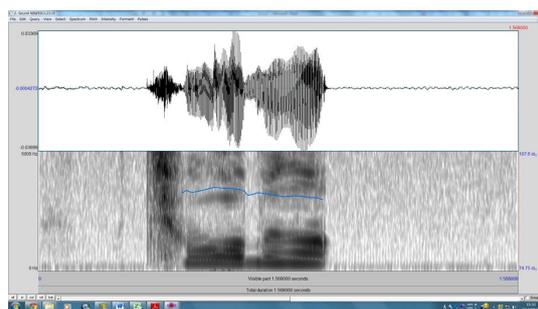
以上述べたような、「とびはね音調」は、上昇の有無によって、音調を2グループに下位分類できるということを定量的に示したことは、本研究の新たな成果であると言える。

・上昇型の例



で、いくら? 安くない?

・非上昇非下降型の例



好きになるとかじゃなくない?

④「とびはね音調」は「同意要求表現」か—
予備的考察—

田中(2011)は、「研究者の内省・観察に基づいた、昇調は単純な問いかけの「質問(意見求め)」、「とびはね音調」は問いかけ音調形式を用いた「同意要求」、という機能の振り分け観はなんとなく共有されているが、使用層においてどのような認識がなされているか、についての量的観点からの言及は内容だ」という問題意識の元、少調査を行った結果、以下のような報告を行なっている。

首都圏大学生を対象とした小規模なアンケート調査の結果から、「～ナイ?」形式をとる問いかけ音調の機能について検討してきた。その結果、たしかに「とびはね音調」は「同意要求」としての機能が優勢ではあるものの、「質問」という機能を果たすという認識も少なくないことがわかった。また、「とびはね音調」に限らず、現代の首都圏に共存する「～ナイ?」形式にあらわれる複数の問いかけ音調には、いずれにおいても、「質問」「同意要求」といった機能と一対一の対応はしていなかった。

しかし、田中(2011)は、短文提示の聴取調査の結果をまとめたものである、実際の自然発話を分析した結果ではない。つまり、実際の対話において、「とびはね音調」がどのような文脈において使用されるのかは不明なままなのである。

そこで、本研究では、「とびはね音調」がどのような文脈において使用されるのかについて、検討を試みた。この調査は現時点では実施途上であり、定量的な結果は公表できず、予備的な考察に過ぎないが、「とびはね音調」に典型的とされる同意要求の文脈と同時に、確認要求の文脈、さらには、同意要求の文脈でも確認要求の文脈でもない文脈でも、使用されることが判明した。自然対話をもとに、「とびはね音調」が生起する文脈を明らかにしたのは本研究が初めてであり、本

研究の成果の一つと位置づけられる（紙幅の都合上、用例の紹介は割愛する）。

以上のように、本研究では、先行研究では触れられていない新知見をいくつか得ることができたが、課題も山積している。大きな課題としては、本研究においては、本稿1.で述べたような問題意識のもと、「とびはね音調」を題材に、音調が日本の地域社会に伝播していくメカニズムの解明を目指したが、調査対象地域である福岡県北九州地域の若年層における言語意識に関する先行研究が存在していなかったこと、「とびはね音調」の音声学的な記述が充分になされていなかったことという、いわば「先行研究の穴埋め」をするための基礎的研究で研究期間が終了してしまい、研究開始当初の目的を達成するための研究を実行するには至らなかったという点である。だが、本研究において、基礎的な資料、データを収集することができたので、今後は、本研究で得られた成果をもとに、さらなる研究の展開を広げることができると考えている。

○参考文献

- 蔡 雅芸 (1996) 「同意要求的疑問文のアクセント核破壊型音調 「これ、面白くない？」について」『東北大学文学部日本語学科論集』6
- 田中ゆかり (2007) 「「とびはね音調」の成立と拡張 アクセントとイントネーションの協同的(collaborative)関係」今石元久編『音声言語研究のパラダイム』和泉書院
- 田中ゆかり (2010) 『首都圏における言語動態の研究』笠間書院
- 田中ゆかり (2011) 「「とびはね音調」は同意要求表現か？」『論集VII』(アクセント史資料研究会)
- 橋本直幸 (2000) 「関門海峡周辺域に見られる言語変容の一側面」『岡山大学言語学論叢』8

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ①岡田祥平, 「九州共立大学キャンパスことば集(第1版)」, 『九州共立大学研究紀要』, 査読無, 第2巻第1号, 2011年, pp.69-82

[学会発表] (計 6 件)

- ①岡田祥平, 「日本語諸方言における同意要求表現とその音調の研究の可能性・展望(、そして誘い)」, 日本音声学会第323回研究

例会, 2011年6月25日, 山梨大学

- ②岡田祥平, 「全国諸方言における同意要求表現とその音調に関する調査に向けて 「とびはね音調」を中心に」, 「文末音調と発話意図とを統合した話し言葉のアンテーションの可能性」研究発表会, 2011年3月9日, ハートピア京都
- ③岡田祥平, 「全国諸方言における同意要求表現とその音調に関する調査に向けて 「とびはね音調」と福岡県下の諸方言とのかわりを中心に」, 九州方言研究会第31回研究発表会, 2011年1月9日, 九州大学
- ④岡田祥平, 「音調の伝播・定着のメカニズム解明の試み 「とびはね音調」を題材に考える」, 近畿音声言語研究会月例会, 2009年5月2日, 西宮市大学交流センター

6. 研究組織

(1)研究代表者

岡田 祥平 (OKADA SHOHEI)

研究者番号: 20452401